

金沢大学資料館の学芸員養成プログラムにおける取り組み

－ 大学博物館の原風景 －

Activities for the museum studies program at the Kanazawa University Museum:
Principal function of the university museum

有村 誠 (人間社会研究域歴史言語文化学系准教授／金沢大学資料館副館長)

ARIMURA, Makoto

(Associate Professor, Faculty of Letters, Institute of Human and Social Sciences,
Kanazawa University / Vice director, Kanazawa University Museum)

1. はじめに

大学博物館の役割とは何であろうか。これまでも、大学博物館全体を視野に入れた提言、各館の取り組みについての報告といった形で、議論がなされてきた¹。国立大学に総合博物館（ユニバーシティ・ミュージアム）が設置されるきっかけとなった学術審議会の報告によれば（文献6）、大学博物館の機能とは、(1) 収集・整理・保存、(2) 情報提供、(3) 公開・展示、(4) 研究、(5) 教育、の5つとされる。ほぼこれまでに議論されてきた大学博物館の目的・機能を網羅するものであり、また一般の博物館にも当てはまることから、大筋で今日の博物館の役割とみなしてよいものであろう。

しかし、大学博物館の実態は多様であり²、各館がもつ役割というのはそれぞれに特色があつていいのではないだろうか。その理由としては、一般の博物館と同列に大学博物館を一概に論じることができないからである。大学博物館は、基本的に大学附属の一機関である。大学に属しているということは、大学が掲げる使命や建学の精神に多かれ少なかれ左右されるということである。さらには、これは必ずしも大学博物館に限った話ではないが、人的・財政基盤の脆弱さが大学博物館の多くにつきまとう。このような状況を考えると、上記の学術審議会の報告で述べられたような5つの機能すべてを充足させることは、必ずしも簡単なことではないと思われる。

本稿は、学芸員養成課程の授業と金沢大学資料館との連携を紹介し、小規模な組織が行うことのできる活動、あるいは大学博物館として取り組むべき役割について考えてみたい。

2. 金沢大学資料館の概要と活動

金沢大学資料館（以下、資料館）は、金沢市角間町の角間キャンパスに位置する。本資料館は、1989年4月1日に設立された。資料館設立の契機は、かつての金沢城内キャンパスからの大学の総合移転であった。移転の際に貴重な学術標本が散逸しないように資料館組織の設置が計画された。資料館の基本構想には、大学が所蔵する学術標本の収集・整理・保存とそれらの公開・展示、そして、総合大学として学問分野を横断するような研究分野の交流が言及されている（文献7）。

設立された資料館の目的は、資料館規程第2条にみることができる。

第2条 資料館は、学内共同利用施設として、金沢大学（以下「本学」という。）及び本学の前身校（金沢医科大学、金沢医科大学薬学専門部、金沢工業専門学校、第四高等学校、石川師範学校（男子部、女子部）、金沢高等師範学校及び石川青年師範学校等をいう。）に関わる資料を収集、整理及び保存並びに展示、公開し、教育研究活動に資するとともに、本学の管理運営、学生・職員の自校教育、社会貢献及び地域文化の発展、向上等に寄与するための情報を提供することを目的とする。

上記の資料館規定によれば、本資料館は学内共同利用施設として位置づけられ、その役割としては、(1) 教育・研究活動に資するために、前身校を含めた大学に関連する資料の収集・整理・保存、展示・公開、(2) 学生・職員の自校教育、(3) 地域社会へ貢献するための情報提供、の3つが掲げられている。

資料館組織は、2014年度の体制では、館長1名（兼任）、副館長1名（兼任）、事務職員3名（学芸担当1名、文書担当1名、事務担当1名）である。専任教員はいない。専任教員が配置された他の多くの大学博物館に比べると、小規模な組織体制である。ただし、資料館研究員、客員研究員という役職が設置されており、資料館の活動や運営を担当・支援する大学内外の研究者12名が職に就いている（2014年度）。施設としては、中央図書館のある建物の一角に常設の展示室（301m²）を備え、その他に、モノ資料用の収蔵庫（180m²）、文書用収蔵庫（123m²）、展示準備室、事務室からなる。

最近の資料館の主な活動としては、大学関連資料の収集・整理・保存といった基本業務の他に、年3～4回ほどの展覧会の開催、講演会の開催、館報や紀要の発行などがあげられる。収蔵資料の公開・活用という点で、本資料館が近年重点的に行っている活動がヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトである。モノ資料のデータベース化・デジタル化を促進し、web上に資料情報と資料の高精細画像を公開することで、仮想展示を行おうとするものである³。同様の活動は他館でも見られるが、同プロジェクトは、金沢大学資料館収蔵資料に限らず、他機関との間で学術資料の公開・活用に関するネットワークを構築しつつある点が特筆される（文献8）。大学に埋もれた学術資源の再発見と新たな価値の創出として、今後の展開が期待される。

なお、金沢大学の使命との関わりでは、2014年に公表された大学改革案「YAMAZAKIプラン2014～金沢大学新ストラテジー～」⁴の「XV 附属図書館・資料館の教育研究活動支援機能の強化」において、「地域住民に対するサービスの向上」と「公文書及び博物資料の確実な保存の推進」が謳われている。上述した資料館規程で言及された資料館の役割が、ここでも再度強調されている。

3. 博物館科目との連携

大学博物館が果たすべき重要な役割の1つは、博物館実習の実施である、ということはこれまでも指摘されてきた⁵。文部科学省の各審議会から出された指針でも、学芸員養成課程が設置された大学に大学博物館がある場合、学内の実習施設として積極的に利用すべきであるとたびたび言及されている⁶。しかし筆者は、学芸員養成課程との関連では、大学博物館は博物館実習の場に限るべきでないと考えている。むしろ博物館実習も含めた文部科学省令が定める博物館に関する科目（以下、博物館科目）全てにおいて、数年にわたる長いスパンで、大学博物館との連携を図るべきであると考えている。博物館科目を大学博物館と連携の下で実施する何よりの利点は、大学博物館

が学内の共同利用施設であることから、時間的にも手続き上も制約が少なく、より融通を利かせた取り組みを実施しやすいということにつける。特に金沢大学資料館のような小規模組織では、担当者に負担がかかるものの、実に小回りの利いたプログラムを企画することができる。

大学博物館と博物館科目との連携の意義は大きく2つ挙げられる。第一は、博物館科目を履修する学生が、博物館科目の理解をより深められることにある。学生にとっては、もっとも身近な博物館として、大学博物館の日常業務に触れることで、博物館科目で扱われる博物館が行う活動全般に対してより具体的に理解できるであろう。第二は、大学博物館活動の学内への周知という点である。金沢大学の場合、資料館のある角間キャンパスにはおよそ7千人の教職員と学生が在職・在籍しているが、資料館が実施している活動については、それほど認知されていないと思われる。地域社会に貢献する以前に、大学博物館の活動はまずは学内で理解されるべきである。学生が授業を通じて、大学博物館の活動に参画することで、学内への博物館活動の周知、そしてそれに対する理解が多少なりとも得られることが期待される。

2014年度現在、博物館科目は9科目、計19単位を数える。現在、金沢大学では、8つの講義科目と1つの実習科目（博物館実習）として対応している。筆者は、博物館科目の構成を考える際に、可能な限り資料館の活動と連携することを念頭に置いた。以下では、2013～2014年度に実施した博物館科目と資料館との連携について述べたい。

3.1. 講義科目での資料館活動との連携

博物館科目の授業では、なるべく資料館で普段行われている活動について紹介するようにしている。特に講義科目で活用したのは、資料館が年3～4回開催する展覧会である（図1）。まずはこの展覧会を授業の題材として利用することを考えた。もっとも多く実施したのは、授業時間外に展示を見学させ、その感想や評価をレポートとして提出させるものであった。ただし、漫然とした展示鑑賞にならないように、各博物館科目の内容に沿った課題を設定し、授業ごとに展示を見るべきポイントを変えるように心がけた。

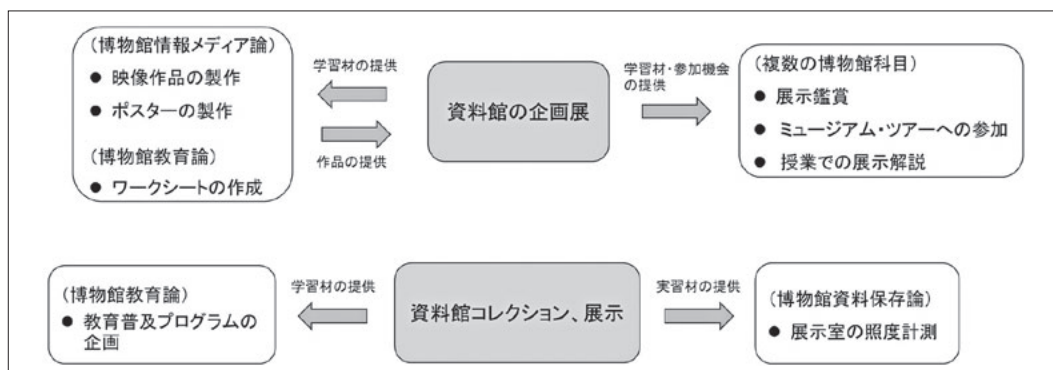


図1 講義科目での資料館活動との連携

さらに、学生に資料館が実施する企画に積極的に参加するように促した。資料館が企画する講演会や、展覧会の会期中に行われる資料館職員による展示解説「ミュージアム・ツアー」などへの参加である。こうした資料館が主催する企画は、博物館科目の授業時間と重なることはほとんどないので、学生は授業時間外に参加することになる。ただ場合によっては、資料館職員と日程調整した

上で、授業時間内に展示室において展覧会の解説を行うことも試みた(図2)。

以上は、展覧会やミュージアム・ツアーといった資料館の企画に参加する形での連携であるが、これ以上に連携の在り方を模索しているのが、資料館活動や収蔵資料を学習材とした演習の実施である。演習は、学芸員養成課程の最終段階に位置づけられる博物館実習の予行としての意味をもつ。これまでに実施した演習は、資料館の展覧会を活用したものと資料館の収蔵資料や展示を題材にしたものとに分けられる。それぞれについて、以下で詳細を述べる。

3.1.1. 展覧会と博物館科目との相互活用

展覧会を活用した演習を博物館情報・メディア論と博物館教育論の授業で実施した。演習を単なる授業内作業に終わらせないために、演習による成果物は展覧会の会期中に資料館側で積極的に活用するように試みた。

博物館情報・メディア論の授業で、特別展『二十年目の邂逅 泣き別れになった四高物理実験機器』(会期：2013年10月17日～11月22日)のCMを作るという課題を与えた。CMは、1分間の映像作品にBGM、ナレーションをつけるという条件にし、MicrosoftのPowerPointを使って作品を作ることとした。受講生は1班5人のグループに分かれて共同で作業を行った。演習では、まず資料館職員に展示室で展示解説をしてもらい、その後、グループごとにCMで伝えたいテーマやCMの構成を議論した(図3)。あわせて映像作品に使う資料の撮影を行った。CMを制作するにあたり、参考として教室で視聴したのは、NHKの番組『日曜美術館』の一コーナーで、美術館・博物館の展覧会を紹介するアートシーンである。CM作品の完成後は、授業内で発表会を開き、お互いに作品の評価を行い、最後に最優秀作品を投票によって決めた。こうして制作されたCM作品は、展覧会の会期中に展示室に設置されたモニターで上映することができた。

他にも、博物館情報・メディア論の授業では、企画展『19世紀の3D～ステレオ写真の世界～』(会期：2013年12月11日～2014年3月20日)を題材として、ポスター制作を演習として行った。この演習もグループで行い、完成後は授業内で受講生による評価を行った。制作されたポスターは、資料館展示室が隣接する附属図書館のギャラリーで、展示会を実施した(図4)。



図2 資料館館長による企画展の解説



図3 展示室でのCM制作の作業風景



図4 ギャラリーで行われたポスター作品の展示会

同じ企画展を別の授業で切り口を変えて取り上げた。博物館教育論では展示鑑賞補助教材の作成というテーマで、企画展『19世紀の3D～ステレオ写真の世界～』を題材としたワークシートの作成を演習課題にした。他の演習と同様にグループ演習とし、演習の発表会とその評価を授業の中で行った。制作されたワークシートは実際に展示室内で配布された(図5)。

こうした資料館の展示会を活用した演習は、学生にとって目的意識を持ちやすく、さらに制作した作品が実際の展示会で活用されることは、学生にとって演習の取り組みに対してモチベーションがあがることに繋がったようである。一方、資料館側にとってもメリットがあった。学生が展示会企画に参加することで、活動のバリエーションが増えることや、博物館科目を履修していない一般の学生に対しても、資料館活動に親しみをもってもらう機会になったことなどがあげられる。



図5 ワークシートの一例
(2013年度博物館教育論7班作成)

3.1.2. 収蔵資料や展示を活用した演習

資料館に収蔵されている資料は約6万点を数えるが、そのごく一部が展示会で展示されるのみで、コレクション全体を俯瞰することは難しい。しかし、コレクションの代表的な資料群は、先に触れたweb上で公開されているヴァーチャル・ミュージアムで見ることができる。博物館科目の授業では、資料館の収蔵資料全体を紹介する時にこのヴァーチャル・ミュージアムを活用している(図6)。



図6 金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアムのデータベース (<http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>)

博物館教育論の授業では、資料館で行う教育普及活動というテーマで、教育プログラムの企画を課題として与えた。プログラム立案の際には、資料館コレクションを知るために上記のヴァーチャル・ミュージアムを利用することに加え、資料館HPから資料館の概略を学ぶこと、また一般の博物館の

HPから実際に行われている教育普及活動を参考にすることなども薦めた。作成されたプログラムの内、秀逸なものについては授業で取り上げた。こうした学生企画のプログラムを、今後は実際に資料館活動の中で活かすことも検討したいと考えている。

博物館資料保存論の授業では、資料の展示環境というテーマの際に、実際に展示室で照度を計測する演習を行った。グループに分かれ展示資料ごとに照度を計測し、教室ではその結果を持ち寄って博物館の照度基準と比較した(図7)。



図7 展示室における照度の計測
(2014年度博物館資料保存論)

3.2. 博物館実習での資料館活動との連携

学芸員養成課程の最終段階に位置付けられる博物館実習は、学内実習(2単位)、学外の博物館で実習を受け入れてもらう館園実習(1単位)からなる。大学に大学博物館が設置されている場合、博物館実習の全てを大学博物館で受け入れるべきという考え方もある⁷。特に受け入れる博物館側から指摘され続けてきた、不勉強な学生が大学から送り込まれる、実習に関して大学との連携が皆無といった問題を考えれば、大学の授業である博物館実習は、学内の共同利用施設である大学博物館が責任をもって受け入れるべきという考え方は理解できる。しかし、学生自らが体験してみたい博物館に行く選択の自由や、館園実習後の実習発表会を通して博物館の多様性や様々な博物館の学芸員の実際を知ることができるという利点は、実習を大学博物館でのみ実施したのでは失われてしまう。また、本資料館のような小規模機関では博物館実習をすべて受け入れる余裕は今のところない。そこで当面は、学内実習と学外の館園実習の双方で博物館実習を組み立てていこうと考えている。

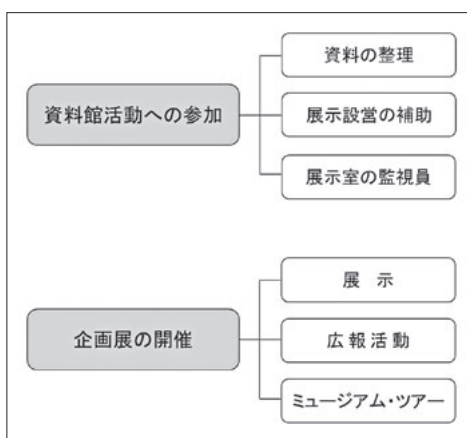


図8 博物館実習での資料館活動との連携

2014年度に実施した博物館実習では、実習生にバックヤードを含めた資料館活動の全般を見学したり、体験したりする授業を目指した。具体的には、実習前半(前期)では、資料館で日常的に行っている資料整理への参加や展覧会準備の補助、展示室の監視員担当など、後半(後期)では資料館展覧会(企画展)の企画を行った(図8)。特に資料館の年間業務の1つである企画展を博物館実習生が担当できたことは、学内共同利用機関であり、教員や実習生と密接な連絡を取り合うことのできる大学博物館ならではの实習であったといえる。展覧会の企画・実施に際しては、資料の取り扱いや展示の仕方については、資料館職員から指導・支援がなされたが、展覧会のテーマ選びから、展示の構成、資料の配置、キャプション・解説等の文章の作成、そして展覧会案内ポスターの作成(図9)、資料館HP上の案内文の執筆に至るまで、展覧会における全ての工程を学生自身が計画し、作業を実施した。こうして学生企画として開催されたのが企画展「植物図『館』」である(会期:2014年12月12日~2015年2月7日)。身の回りの植物に目を向けてもらいたいとの意図の下、

資料館コレクションや学内にある植物に関連した学術資料を用いて、植物の図鑑を展示で表現したものである。

実習では他の博物館科目の演習と同様に、グループでの共同作業を基本とした(図10)。実習時間以外ではほとんど接点のないメンバーによる共同作業に加え、初めての仕事も多く、実習生は苦心しているようであった。実際に、企画展終了後に行った意見交換や感想文を通して実習の振り返りを行ったところ、展覧会を開催することが如何に大変なことか身をもって知ったという感想が多かった。と同時に、博物館展示の中で自分たちの選んだテーマを表現するという楽しみや達成感も得られたようである。

展覧会の企画は実習後半(10～11月)に行ったが、この時期、実習生の多くが学外での館園実習を終えており、このことが展覧会の立案においてプラスに作用した。展示の構成、展示の見せ方等、館園実習で学んできたことが随所に活かされていた。反面、展覧会を企画することは、授業時間以外にも多くの時間を準備に費やすことになり、この時期実習生全員が卒業論文提出を控えた4年生であったことから、かなりハードなスケジュールとなった。企画展開始時期の調整など、今後、資料館と相談すべき点かと思われる。

展覧会の会期中には、実習生代表が大学のラジオ放送(金沢大学Radio Campus)でインタビューに答えたり、実習生自らが展示解説を行うミュージアム・ツアーを行ったりするなど、展覧会を軸とした活動を展開した。こうした活動は、当然資料館の活動の幅を広げることになり、また資料館活動そのものの活性化にもつながったと思われる。1年間を通じての博物館実習であったが、学内に資料館という実技演習で活用できる施設が存在することの利点をつくづく感じた。

4. おわりに：大学博物館の原風景

最後に、大学博物館が果たすべき役割について、金沢大学資料館の状況も念頭に置きながら考えてみたい。

4.1. 学術資料の管理

大学博物館機能の根幹をなすのが、大学に関連した学術資料の収集・整理・保存であることに異論はないであろう。大学に蓄積された学術資料には多種多様なものがある。それらを学術資源として管理できれば、新たな研究や教育に利用できる可能性があり、あるいは文化資源とすれば、社会に資するような活用方法が見いだせるかもしれない。さらには、大学の学術資料を人類がこれま



図9 学生企画による展覧会「植物図『鑑』」



図10 博物館実習での展覧会企画の作業風景

で行って来た学問という営みの結果であるとするならば、将来に継承すべき文化遺産と捉えられるかもしれない。国際的にみても、2001年に国際博物館会議（ICOM）の下にUMAC（University Museums And Collections Committee：大学博物館委員会）が設置され、大学が所蔵する学術資料が単に大学の資産であるにとどまらず、（人類の知的活動の所産であるという意味において）世界的な遺産とみなしうることに言及している⁸。大学に存在する学術資料にどんな価値を見出し、どのような活用法を見出すかは、アイデア次第である。

大学博物館は、まずは学内に眠る有用・貴重な学術資料の管理（収集・整理・保存）を進めることが第一の役割だと思われる。学術資料を使っての研究やその成果の発信はその次であり、学術資料の管理なくしては、以下で述べるような様々な活用もできない。

4.2. 大学の窓口

「社会に開かれた大学」という考え方の中で、大学の学術成果発信の場として、また生涯学習の場として、あるいは大学の窓口として、大学博物館を位置づけることも長く論じられてきた⁹。大学博物館が市民を対象とした活動を行うということである。筆者はもう少し対象を狭めて、将来大学で学ぶ可能性のある若者を呼び込むような活動を目指すという方向性に魅力を感じる¹⁰。今日、オープン・キャンパスなどで児童・生徒が大学を訪れる機会は少なくない。将来の大学という組織を支えてくれる彼らこそ、大学博物館が視野に入れるべき対象ではないだろうか。

まず、大学博物館が発信・公開すべき情報は、収蔵するコレクションの情報やそれに関連する研究成果であろう¹¹。これに加えて、大学博物館を大学における学術成果の情報発信の場として位置づけられるのであれば、大学博物館が発信・公開する情報は、博物館が収蔵している資料やそれに付随した研究成果に限らず、大学全体の学術成果・教育活動にまで及ぶ。まさに大学の窓口である。

しかし、総合博物館としての位置づけもない小規模組織の場合、大学全体の学術成果の発信の場となる可能性はほとんどないであろう。普通、大学の学術成果の公開・発信は、研究室や部局単位で行われるからである。しかし代わりに、大学博物館を学内で実施している教育活動の情報発信の場として利用することはさほど難しくないと考えられる。本稿で紹介してきた博物館科目授業の例や学生が制作した美術作品の展示（文献15）など、大学で行われている教育活動を公開・発信する場として、大学博物館はふさわしいと思われる。

他方で、一般市民を対象とした生涯学習への参画など、大学博物館が積極的に地域社会に貢献すべきであるという認識は広がりつつある。金沢大学資料館についても、上述の通り2014年の金沢大学改革案の中で、地域住民へのサービス向上が謳われており、社会に資するような活動を考えていかなければならない。残念ながら本資料館は、金沢市中心部からのアクセスの悪さや土日・祝日の休館などの条件から、一般人が利用しやすい施設とは言えない。しかし、金沢市民への資料館活動を周知する広報活動や市民を対象とした教育普及活動の企画などに関しては、まだまだ改善し開発していく余地はあるであろう。

地域との連携、または地域博物館としての役割は、今後ますます、大学博物館の活動において重要視される面だと思われる。そうした中、本資料館は2014年度から、金沢市内の博物館と共同で、市民・学生を対象とした「金沢の歴史と文化」と題した連続講義を始めた。資料館も地域との連携を少しずつ模索し始めている。

4.3. 学生教育の場

大学という学術専門機関に設置された大学博物館には、一般の博物館とは異なる役割・使命があるべきという意見には同感である¹²。その1つが、繰り返し述べるように、学生教育の場としての役割であり、このことは大学博物館が学内施設である以上、決して失われることのない機能の1つであろう。本稿では、資料館と学芸員資格養成課程との連携の事例を取り上げたが、これにとどまらず、大学博物館の収蔵資料や活動を利用した授業はもっと増やせられると思われる。そのためには、収蔵資料を実際に扱った授業プランを提示するなど、大学博物館から教員へ働きかけがあってもいいかと思われる。

本稿では、博物館科目と資料館との連携について紹介したが、本資料館のような専任教員のいない限られた人員で、資料館活動と学芸員養成課程を連携させる取り組みには困難が多い。しかし、大学博物館が存続する以上は、博物館科目との連携は、程度の差はあれ必須である。本稿で論じてきたように、大学博物館が博物館科目において積極的に関わることは、博物館学教育の質を高め、また大学博物館の活動の幅を広げるという意味において、十分に意義のあることだと思われる。

本稿において、学芸員養成課程における金沢大学資料館の最近の取り組みを紹介したのは、大学博物館は学生の教育・学習のための学内の共同利用施設であるという原点を振り返りたかったからである。「社会に開かれた大学」として、大学博物館の活動を充実させ、その幅を広げることはもちろん重要であるが、それに学生教育を組み込ませていくということも大学博物館として重要な役割であると思われる。

参考文献

1. 熊野正也「大学博物館のあるべき姿への一試論」『Museum study』3、7-29頁、1992年
2. 黒沢浩「大学博物館における教育活動—生涯教育と大学教育とのかかわり—」『明治大学博物館研究報告』2、3-17頁、1997年
3. 西野嘉章『二十一世紀博物館—博物資源立国へ地平を拓く』東京大学出版会、2000年
4. 高橋有美「大学博物館に関する序論的検討—大学との関連性を中心に—」『生涯学習・社会教育学研究』第26号、51-58頁、2001年
5. 伊能秀明「ユニバーシティ・ミュージアムの望ましいあり方—明治大学博物館の生涯教育事業と今後の方策について—」『明治大学博物館研究報告』11、29-44頁、2006年
6. 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）—学術標本の収集、保存・活用の在り方について—」、1995年<http://protist.i.hosei.ac.jp/science_internet/gakushin/UnivMuseum.html>（2014年1月10日アクセス）
7. 金沢大学資料館「金沢大学資料館概要」『金沢大学資料館だより』21、2-6頁、2003年
8. 高田良宏・林正治・堀井洋・堀井美里・山地一禎・上田啓未・古畑徹「学術資源情報の共有と「場」の創出—学術資源リポジトリ協議会の活動の展開—」『大学ICT推進協議会2013年度年次大会（AXIES2013）論文集』2013巻1号、T1A-1頁、2013年
9. 佐々木奈美子・吉住磨子「博物館相当施設という選択と大学博物館」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』19(1)、217-227頁、2014年
10. 黒沢浩「生涯学習時代の大学博物館」『明治大学博物館研究報告』5、103-107頁、2000年
11. 大野照文「大学博物館等協議会2012年度大会・第7回博物科学会開催報告」『MUSEO ACADEMIAE 大学博物館等協議会ニューズレター』15、1-2頁、2013年

12. 大野照文「大学博物館が研究以前に行なわねばならないこと」『地学雑誌』107(6)、836-843頁、1998年
13. 大野照文「大学博物館における社会連携：京都大学総合博物館を例に」『化石』83、22-29頁、2008年
14. Clarke, Giles「21世紀における大学博物館の役割」『名古屋大学博物館報告』18、166-167頁、2002年
15. 三友昌子「大学博物館における学生作品の展示について—企画展「布、再びみたび」報告—」『東京家政大学博物館紀要』15、119-134頁、2010年

注

- 1 例えば、文献1～5など。
- 2 大学博物館の多様性については、文献4：52-54頁に詳しい。
- 3 以下のwebページを参照のこと。<http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>
- 4 以下のwebページを参照のこと。<http://www.kanazawa-u.ac.jp/plan/>
- 5 例えば、文献2など。
- 6 文献9：221頁
- 7 文献2、文献9など。
- 8 UMAC決議を参照 (<http://publicus.culture.hu-berlin.de/umac/>)。
- 9 文献1、2、10など。国立大学が法人化する過程で、大学博物館には大学の社会貢献の窓口となる役割がより期待されるようになった（文献11：2頁）。
- 10 文献12：840-841頁、文献13：27-28頁、文献14
- 11 文献12：838頁
- 12 文献3：153-158頁